

イエズス会士——フランシスコ・ザビエル

安野眞幸

(あんの・まさき)

血塗られたアンシャンレジーム、魔女狩り、異端尋問、宗教裁判、キリスト教原理主義——ザビエルが日本にもたらそうとしたものは、西欧近代が必死になって否定しようとしたおぞましく忌まわしいものである。

思い出してみれば、私共が小学校・中学校で習った日本の歴史の教科書には、ザビエルの来日、キリスト教の布教という項目が必ず記載されていたと思う。これは文明開化をスローガンとする明治の日本国家が、西欧の学問である「世界史」を取り入れたときから始まったと思われる。西欧人の構築した「世界史」では、ザビエル来日は歴史的な大事件となっていたので、日本でもそれを一概には無視することも出来ず、日本史上における重要な出来事として教科書に載せ、気が付けば今日に至ったのだらう。

【イスラム教とキリスト教】

イスラム教徒が地中海を内海とし、西欧キリスト教世界を圧迫した時代をイスラム教とキリスト教関係史の第一幕とするなら、十字軍以来のヨーロッパ世界の拡大は第二幕であり、ニューヨークの世界貿易センタービルに対する連続自爆攻撃に象徴される9・11以降の現在は、第三幕の始まりとならう。「十字軍」を叫ぶブッシュによるイラク民主化の継続は、「文明の衝突」として、イスラム教原理主義とキリスト教原理主義との不毛な対立の繰り返しとしてしばらくは推移することになるであらう。

ともあれ世界貿易のルートから閉め出され、内陸に閉じこめられたヨーロッパが、そこからの脱出を試みた第二幕の担い手たちは、十字軍を担ったキリスト教騎士団である。騎士階級の人たちがキリスト教の信仰

を守るために、地域を越えてヨーロッパ規模で結合し、キリスト教騎士団を形成し、聖地イスラエルには十字軍国家を、バルト海沿岸にはドイツ騎士団領を作り、ヨーロッパ世界の拡大を図った。イベリア半島における「再征服運動」もこうしたキリスト教騎士団による十字軍活動の一環であった。

ポルトガル国家によるアフリカ南端の喜望峰を廻るインド航路の発見は、コロンブスによる新大陸の発見と並んで「地理上の発見」といわれ、第二幕を飾る華々しい出来事である。ポルトガルは、これまでイスラム教徒たちが平和に交易活躍をしていたインド洋やモルッカ諸島（胡椒諸島）に軍事的に進出した。イスラム教徒を追放し、キリスト教徒の活動圏の拡大を図った点では、イベリア半島における「再征服運動」と連続しており、この軍事的進出はポルトガルに大きな富をもたらしたであろう。

当時のイベリア半島では、異教徒に対し「聖戦」が行われ、イスラム教徒の追放、キリスト教徒による国土の再征服のみならず、昔からの住人セファルディアのユダヤ人に対しては、追放かキリスト教への改宗かを迫り、新たにキリスト教徒になった人々「マラーノ」は監視され、隠れユダヤ教徒であることが分かると宗教裁判にかけられ、火あぶりにされた。キリスト教

原理主義に基づく「聖戦」は、内に向かつては異端尋問、魔女狩り、魔女裁判等々、近代西欧が必死に否定した忌まわしいものとなった。

この魔女狩り・マラーノ狩りはインドでも行われ、異端者は火あぶりにされた。それ故ポルトガルはインド洋を軍事的に制圧することは出来ても、また如何にキリスト教の布教を大義名分として掲げていても、血塗られたキリスト教が広まることはあり得ず、インド洋世界で、既にイスラム教やユダヤ教の影響下にあった教養ある都市住民たちをキリスト教の世界に引き入れることは出来なかつた。ポルトガルはインド洋世界にはじめて参入したとしても、そこはイベリア半島に続く既知の世界であつた。

時代がキリスト教騎士団から、国民国家へと傾斜し、ルターやカルビンによるローマ教会批判が始まる頃に、時代に逆らい「イエスの軍隊」を標榜して形成された修道会がイエズス会（コンパニア・デ・イエズス）である。会の創設者ロヨラもザビエルもイベリア半島の騎士階級の出身者である。ポルトガル領インドへの布教の任務を帯びたザビエルが、イスラム教徒やユダヤ教徒のいる、いわば「既知の東洋」で生涯を終えたなら、彼は「東洋の聖人」にも、歴史上の人物にもなることはなかつたであろう。

【未知の東洋との遭遇】

これまでイスラム教が普及せず、キリスト教徒たちにとつても「未知の東洋」であつた極東の日本にやつて来て、教養ある日本人が自主的に道理に従ひキリスト教に改宗することを目の当たりにして、「理性性に基づく宗教」であるキリスト教の普遍性を確認できたことが、ザビエルを歴史上の人物とした。日本布教の成功によりキリスト教の普遍性は事実として証明されたわけである。ここにヨーロッパキリスト教徒にとつて、日本布教の持つ世界的な意義がある。こうしてザビエルは東洋布教の聖人となつた。

ザビエルの広めたキリスト教、当時のカトリック教は、スコラ哲学と一体化したもので、世界創造神の觀念を背景にして、自然界に対する合理的な説明が神の存在証明となつており、当時の人々には「合理的な宗教」と信じられていた。そんな理屈に「既知の東洋」に住むイスラム教徒やユダヤ教徒が心を引きつけられるはずはなかつた。一方、元々創造神の觀念がなく、「草木国土悉皆成仏」をいう日本では、デウスの觀念は「仏心」の新たな説明として、当時の教養ある日本人々の心を強く引きつけたのである。

本来「成仏」とは「悟りを開くこと」で、かなり高度な知的活動だから、全ての人には到達困難なものな

のだが、日本の天台本覚思想では「草木国土悉皆成仏」をいい、「有情・非情の区別無く、すべてのものは皆成仏する」とした。「草木」という植物や「国土」という無生物を仏教では「非情」と呼び、輪廻の輪の中にある人や動物からなる「有情」と区別するが、「草木土砂」を引き合いに出し、「草木土砂」でも成仏するのだから「女人成仏」「悪人成仏」は間違いないという論理展開になつていた。

この議論は現代の日本人の一般的な平等意識、死ねば皆同じで、成仏するのだという考えの基になつており、近世初頭の寺請制度を支える思想的な背景にもなつた。キリスト教やスコラ哲学の世界では、生物と無生物とを分けた後で、生物をさらに魂のある動物とない植物に分け、人間を理性を持つとしてさらに動物から区別していた。また機械論的な自然観が生まれ、無生物の世界にも神の理性は及んでいとなると、本覚思想とザビエルたちの述べる自然現象の説明との間には共振関係が可能となつた。

ここに「日本人は道理に従う民族だ」「日本人は理性的だ」というザビエルをはじめとする宣教師側の日本評価が生まれ、日本布教は進展した。当時のヨーロッパではルターやカルビンらによつて新教徒が生まれ、ローマ・カトリック教会は勢力を失つていた。そ

のような中に日本布教成功のニュースが伝わり、カトリック教会は蘇り、勢力を挽回した。南ドイツからポーランドにかけては、カトリックがルター派から奪い返した領域である。日本布教の成功は西欧キリスト教世界に反作用をもたらしたのである。

今の私共日本人は、自分達は無神論者か多神教徒だとの自覚から、「アラ―は偉大なり」を叫ぶ一神教の原理主義者たちの心は理解出来ないと思つてゐる。しかし当時の日本人は近世以降現代に至る現世主義的な「浮世」観ではなく、来世主義的であり、地獄・極楽、死後の世界での魂の救済などの観念に強く縛られていた。中でも当時の仏教の教えは、ラビ・宗教学者という宗教指導者を持つユダヤ教やイスラム教よりも、出家制度・修道院制度を共有している点で、当時のローマ・カトリックの在り方に近かつた。

それ故日本に渡来したイエズス会士たちは、新しくインドから来た仏教僧として受け入れられたし、イエズス会士たちもまた禅宗の僧侶に倣つて、清貧主義を棄て、絹の衣を着て日本社会にとけ込もうとしたのである。

【普遍主義か原理主義か】

インド洋世界においては、イスラム教やユダヤ教に

対する「聖戦」を標榜しながら、教養ある都市の住人たちからは相手にされず、都市の住民以外の人々を対象に細々と布教活動を続けるより他になかつたが、日本布教の場合には様相を異にしていた。日本布教の成功には西欧の合理主義がクローズアップされ、キリスト教が合理的宗教であることが証明され、ローマ・カトリック教会の普遍性が再確認された。日本布教の表層、現象面においては「日本人は道理に従う民族だ」「日本人は理性的だ」が強調された。

この後日本はキリスト教を禁止し、宣教師たちの受け入れを拒否し、日本キリシタン史の終幕は殉教とむごたらしい弾圧になつて行くのだが、キリスト教の日本布教成功のエピソードは世界的な出来事として、その後長く特権的な位置を占めることとなつた。受容と拒否・排斥という歴史の全体像に対して、歴史の後半部分は無視され、日本布教の成功は西欧の全世界に対する優位を証明するものとして、その後の帝国主義列強の世界の植民地化、世界分割をも正当化するイデオロギーにもなつていった。

戦争中のいわば「日本原理主義」の横溢する息詰まる雰囲気の中で、時局に抵抗しながら書き続け、戦後一躍ベストセラーとなつた和辻哲郎の『鎖国』においても、西欧合理主義との関連から、西欧との接触を断

ち、鎖国をしたのは「日本の悲劇」とされた。この議論は独善的な「日本原理主義」に対する批判という側面でも多くの読者を獲得したが、西欧近代合理主義と世のスコラの合理主義との区別をしていないという欠点があり、西欧人の持つ伝統的な世界史を、無批判的に追隨するものでもあった。

また明治以降の文明開化の観点から、日本布教では近代的な学校制度のはしりであるコレジヨやセミナリヨ、ノビシアドなどを導入したことや、ヨーロッパと同じ教養教育がなされたことが注目され、強調されてきた。しかしザビエルが日本にもたらそうとしたものは、輝かしい近代西欧社会の裏側にある、忌まわしくおぞましいキリスト教原理主義であり、血塗られたアンシャン・レージュムである。ザビエルを初めとする日本イエズス会の性格が明るく合理的なものであったということとはできない。

キリスト教原理主義の立場から、イエズス会士たちは「殉教」を煽り、日本キリシタン史の終幕は殉教と弾圧の歴史になって行くが、ここには異端尋問・宗教裁判の暗黒面が逆転して実現され、イエズス会の蓄えていた魔女狩り・マラーノ狩りの知識がイエズス会自身に向かつて遺憾なく発揮された。江戸時代を良く言うことは現在でもタブーかも知れないが、敢えていう

ことが許されるのなら、徳川幕府はイエズス会を追放したことで西欧近代社会と同質な現世主義的な明るい社会を日本にもたらしたのである。

ユダヤ教徒から新たに改宗して新キリスト教徒となった人で、成功した貿易家でザビエルの働きを見て感激して日本でイエズス会に入会した人にダルメイダがいる。彼は日本イエズス会の財政上の基礎を築き、ザビエル後の日本布教長として活躍したトルレスの下で大活躍し、日本国中を旅行して廻り、西欧医学を日本にはじめてもたらした人でもある。それにも拘わらず、後のイエズス会の規則がマラーノは入れないとなったからであろうか、晩年は不遇で、彼のことをフロイス『日本史』は何も記していない。

同様な人物に『東洋遍歴記』の著者メンデス・ピントがいる。冒険商人として成功した彼もまた資産をなげうって一五五六年にはイエズス会に入会し、インド管区長のヌネスと共に、インド副王の使節として日本にやってきたのに、日本でイエズス会を脱会し、その後『遍歴記』を記したのだろうか、その点にはなにも触れていないし、その後の行動はイエズス会の記録からは抹消されている。『東洋遍歴記』の翻訳者岡本多希子は東洋文庫の解説で、恐らくマラーノであったのだろうとのアイレスの説を紹介している。